

# 境界をのぞむ「曲線の大屋根」



## ■計画地の歴史と今

まだ琉球と呼ばれていた時代市町村は間切(読み:マジリ)として分けられていた。現在の今帰仁村にあたる今帰仁間切から1666年、伊野波間切が分割され、伊野波間切はのちに本部間切と改称し、現在の本部町に至る。



昭和47年2月 沖縄県では「沖縄国際海洋博覧会」が開催され、本部町には、本土や海外からの海上輸送による積み荷が多く運ばれることになり、その拠点として今回の設計競技の計画敷地である「本部港」が開港されることとなった。



現在の本部港では最大700人の人をフェリーで運ぶことができ、各離島と本島を繋ぐ境界に位置している。また、この土地は東には緑地帯、西側には瀬永島と海の水平線が広がっていることで、海の青と緑地帯の緑、二つの景色を一度に見ることができる。



## ー コンセプト ー

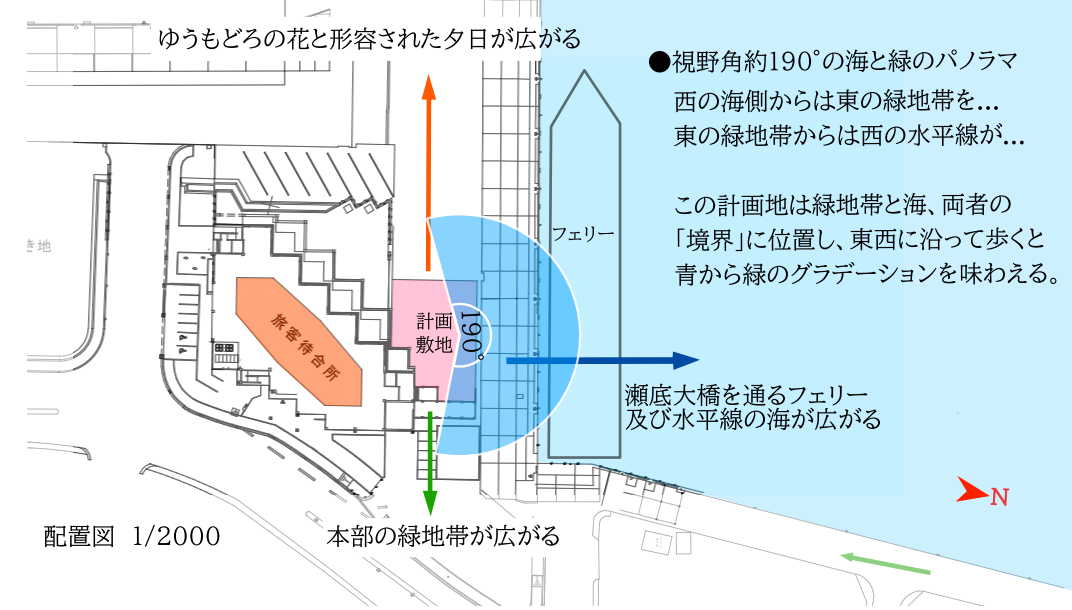
本部町は「太陽と海と緑」観光文化のまちを将来像として、身近に感じることのできる自然や、移りゆく季節の表情は町民だけではなく、観光客、他市町村の人々まで魅了する。

中でも、西の海に沈む夕日は「**ゆうもどろの花**」と形容されるほど美しく、その様子は時代が過ぎても語りつがれ讃えられた景色の1つとされている。

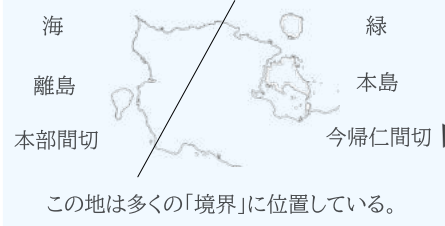
本計画地は西側に「海」東には「緑」が広がっており、海と緑の境界の位置に属している。  
**「緑に包まれながらも海を臨む」ことができるこの地では、  
 広がる海と自然の緑、両者を臨むことができる屋根の形成と**

利用者の視線が流れる施設計画を行うことで、この港を利用する人々が普段よりも**長い時間自然と向き合うことができ**、町民だけではなくその地を利用する人々に**本部町の魅力を伝える建築を提案する。**

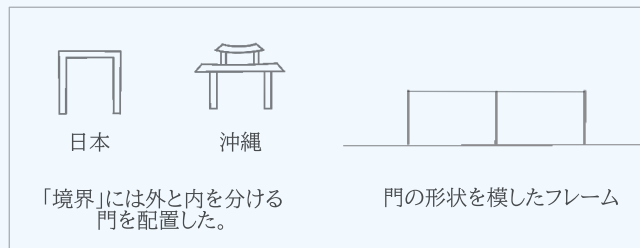
## ■配置・環境



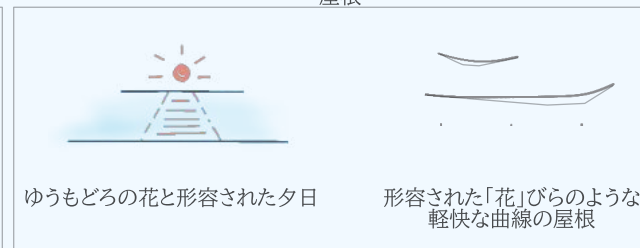
## かたちのなりたち



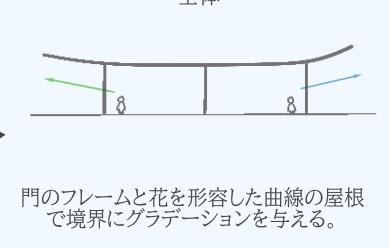
## フレーム



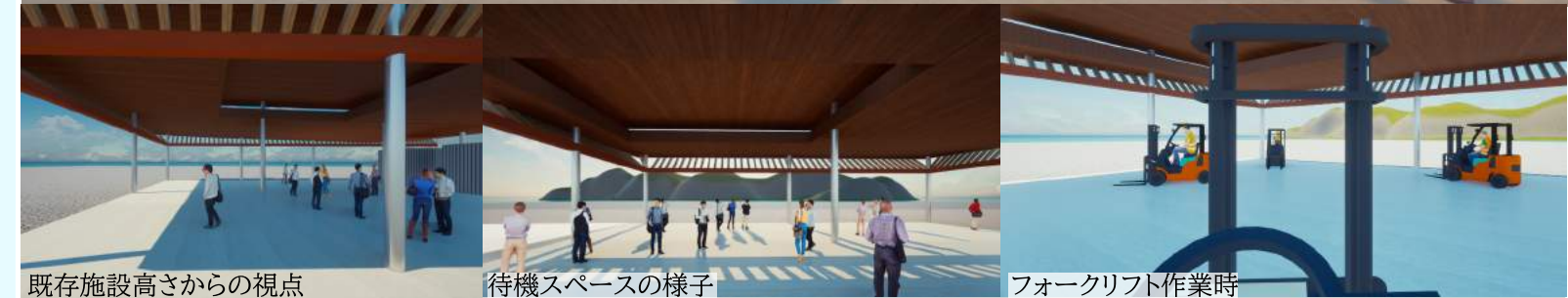
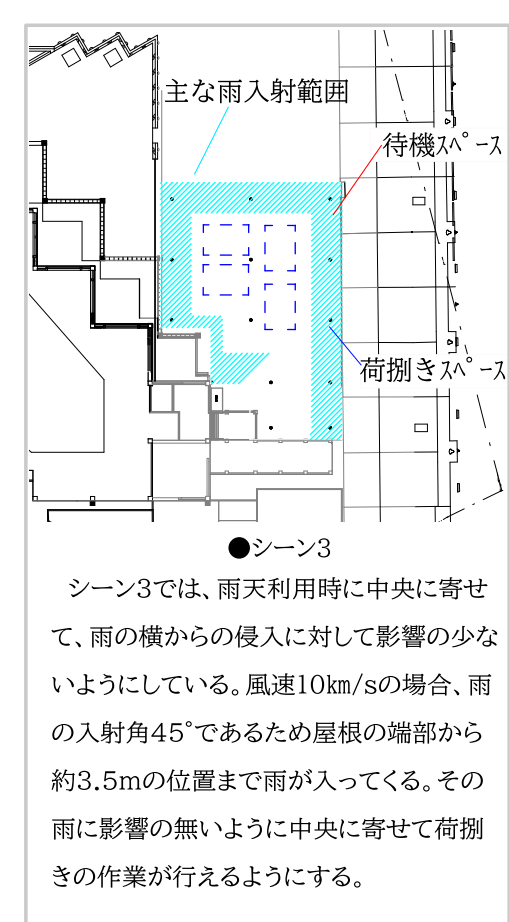
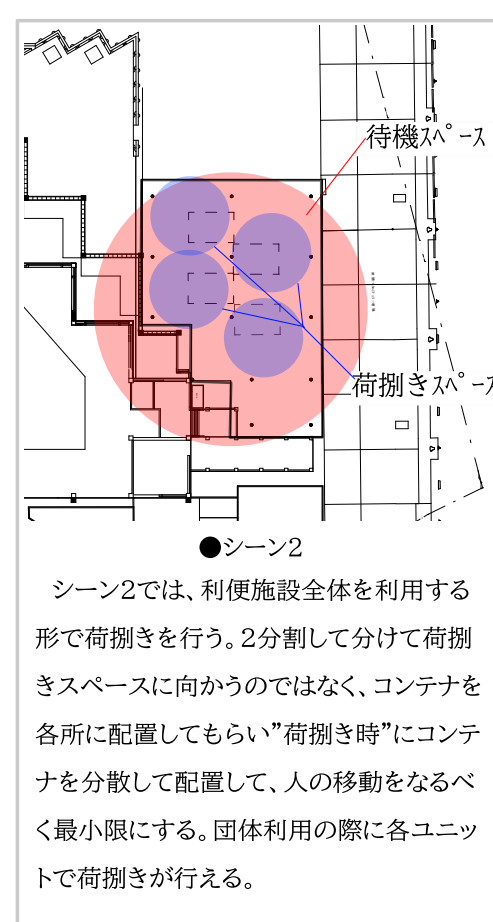
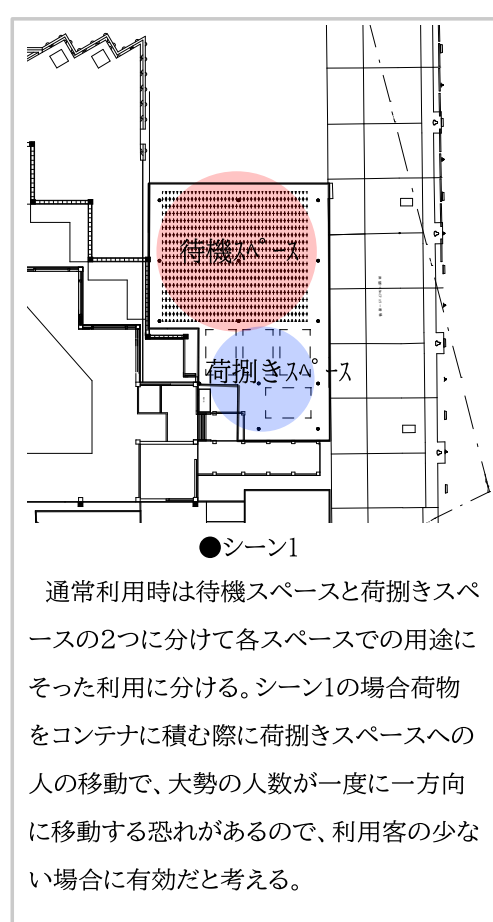
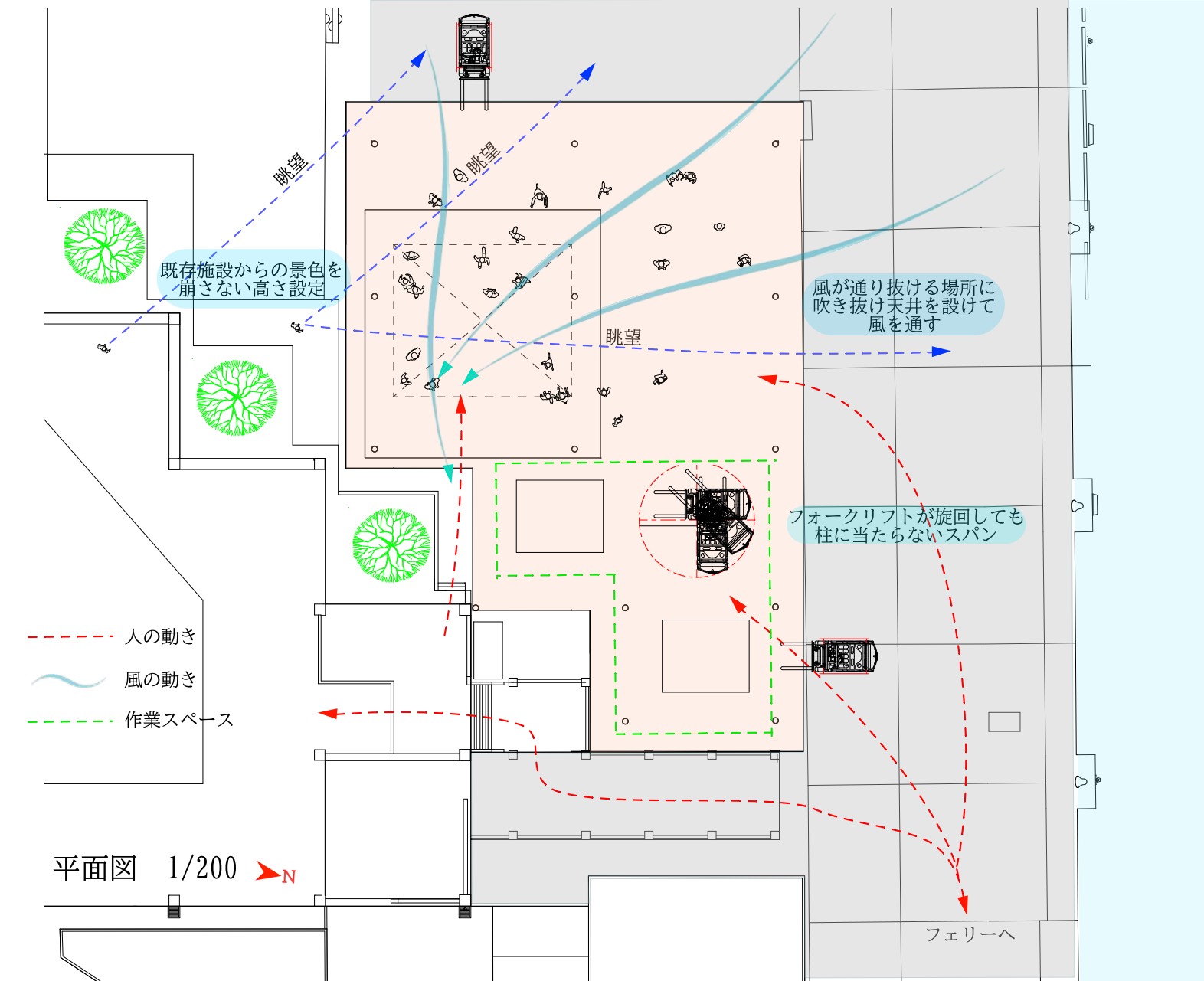
## 屋根



## 全体







<p>■人と自然にやさしい計画</p> <p>今回の提案では、自然、利用者、作業員の視点から計画を進めた。</p> <p>■自然 敷地周辺状況及び歴史から汲み取り調和するデザイン</p> <p>■利用者 利用客、この地に訪れる人が継続的に利用できる設計</p> <p>■作業員 フォークリフト作業の際にできるだけ事故原因を取り除いた作業スペース</p>	<p>■景観への配慮</p> <p>既存建物からの景色を疎外しないように計画施設の高さは3.7m以上に設定し、既存建物から見える景色を崩さないよう配慮した。</p>	<p>■構造計画</p> <p>鉄骨造を用いることで広いスパンを確保フォークリフトの作業を妨げないようにしている。屋根の仕上げ部材を曲線に躯体を直線にすることでコストを抑えている。</p>
<p>■フォークリフトの事故原因</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>床の段差でつまずき横転。</li> <li>ツメの旋回中に段差、物に衝突</li> <li>フォークリフトのマスト部死角で前が見えず人、物に衝突</li> </ul>	<p>■本計画での改善策</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>床は全てフラット</li> <li>各柱のスパンを広げ旋回角度の確保</li> <li>スパンを広く取り、視野角の確保及びフォークリフトの動線を考慮</li> </ul>	<p>■建築概要</p> <p>階数 : 1階</p> <p>構造 : 鉄骨造</p> <p>床面積 : 600㎡</p> <p>最高高さ : 5.60m</p>
		<p>■仕上げ</p> <p>柱:鉄骨トブ 漬け溶融亜鉛メッキ仕上げ</p> <p>床:鉋物骨材配合散布型耐久床仕上げ</p> <p>屋根:次世代型ガルバリウム鋼板(SGL)</p> <p>天井:再生木材</p>

